

神子柴石器群の特質とその意味  
－大型尖頭器・石斧・石刃石器群－

橋 本 勝 雄

## 目 次

はじめに .....	21
1 資料の再検討 .....	21
(1) 帰属時期と器種認定 .....	21
(2) 隆起線文土器の伴出の是非 .....	23
(3) その他 .....	25
2 大型尖頭器の特質とその意味 .....	25
(1) 遺跡の分布 .....	25
(2) 遺跡の性格と工程連鎖 .....	25
(3) 石器石材の特質 .....	31
3 神子柴石器群の特質とその意味 - 神子柴石器群の比較検討 - .....	33
(1) 分布特性 .....	33
(2) 立地と生業 .....	35
(3) 製作と消費 .....	35
(4) 本ノ木型尖頭器の登場と地域性の萌芽 .....	39
おわりに .....	40

## はじめに

表記の神子柴石器群とは、旧石器・縄文時代移行期の神子柴・長者久保文化期に列島全体を覆った特異な石器群である。主な構成要素としては、大型尖頭器、石斧、及び石刃石器群（彫搔器・削器等）があり、時としてこれに土器が伴う。

筆者は、これまで当該資料の悉皆調査の成果を基に、石斧（橋本2017ほか）、石刃石器群（橋本2025）、本ノ木型尖頭器（橋本2012ほか）について逐次検討してきたが、本ノ木型以外の大型尖頭器については大きな課題となっていた。

これを受けて本稿では大型尖頭器の検討を踏まえて、三者の相互比較により、神子柴石器群の位置づけとその歴史的意義を取りまとめることとする。また併せて、当該石器群の諸特徴（技術・形態・石材等）や遺跡の分布・立地をもとに、主に本州方面の地域間交流のさまにも論及することとしたい。

なお、神子柴石器群のうち、大型尖頭器については、多くの先学の見解（白石1989ほか）を受けて、ここでは原則として10cm以上の大きさで両面加工ないしは半両面加工のもの（本ノ木型を除く）を対象とし、これに未成品や復元長が10cm以上の破損品・破片を加えた。むろん、当該期の尖頭器は大型一色ではないので中型・小型の単独例の遺漏は否めないが、結果的に主要遺跡はカバーでき、資料操作上、大きな支障がなかったことをあらかじめ付記しておく。

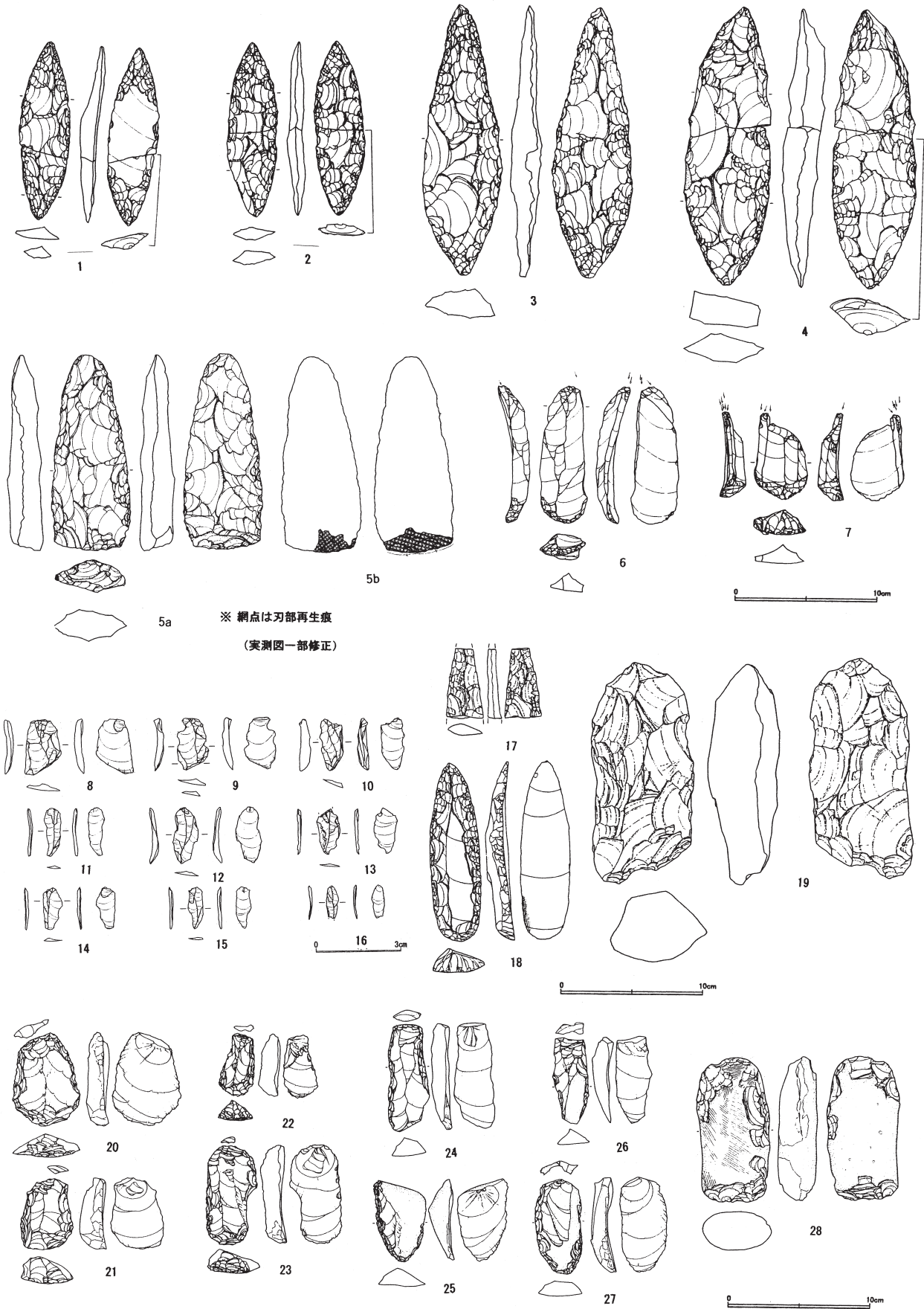
### 1 資料の再検討（第1・第2図）

今回の検討に先立ち、まずは、分析対象資料のうち遺物の一括性や器種認定が疑問視されるものについて若干見直しを行ったので、その結果を列挙する。これが今回の資料操作の前提となる。

#### （1）帰属時期と器種認定（第1図）

山形県上野A遺跡は原産地（製作）遺跡であり、5回の発掘調査で計73,463点の旧石器時代資料が出土している。報文によれば、石器組成は、（大型）尖頭器（第1図1～4）、彫刻刀形石器、ナイフ形石器、二次加工ある剥片のほか大量の剥片類・石核等からなるとされていた（米倉・阿部2002）。ところが筆者の資料調査では、①尖頭器と報じられた資料の中に丸のみ刃を有する神子柴型石斧（第1図5）があること、②彫刻刀形石器の中には彫搔器（第1図6・7）が多数含まれていること、③少数派のナイフ形石器（5点）は混入の可能性が高いことなど、本来は神子柴石器群を主体としていることが判明した（橋本2025）。なお、上野A遺跡の神子柴型石斧は、東北頁岩が支配的な石器群のなかにあつて、白色で軟質の凝灰岩製であり特異な存在と言える。また、水の影響を受けており表裏には褐鉄鉱が付着している。他の石器にはみられない特徴であり搬入品に属する。

茨城県後野遺跡A地区については、報告書刊行後、及川穰らの明治大学のグループによって、資料の再検討がなされた（及川ほか2008）。新たな見解としては、①黒曜石の産地が青森県深浦産（報文：信州系）であること。②黒曜石製剥片はすべて同一母岩であり、これらは細石刃の可能性があること（第1図8～16）、③「槍先形尖頭器の調整剥片と考えられる剥片類があり、単一の母岩に属する頁岩である」こと、④「石斧はホルンフェルス製の成品が単独出土としてあり、刃部再生剥片を含む調整剥片は「凝灰岩」とされる石材を原料とし、これも単一の母岩である」ことなどが指摘された。このなかで①の産地推定については北方系の石器群であることから妥当な結果と考えられる。②の黒曜石製剥片は同一母岩・同一規格の細石



※ 網点は刃部再生痕  
(実測図一部修正)

第1図 再検討を要する資料① (上野A遺跡1~7、後野遺跡A地区8~19、林小原子台遺跡20~28)

刃様の小型剥片ではあるが、打面の形状と背面側の面構成や強く内湾し先細りとなった側面形から搔器・削器類の再加工時に生じた調整剥片と捉えられる。事実、第1図9の打面は搔・削器の刃部裏面（縁辺部）の一部であり、当該資料がその刃部調整剥片であることは明確である。③については材質が石刃石器群にしばしば使用されている東北頁岩であり母岩も多様であることから、槍先形尖頭器ではなく搔器、削器、彫刻刀形石器等の石刃石器群の再加工時の調整剥片の可能性が高い。なお槍先形尖頭器（第1図17）の石材については報文の「流紋岩」から「ガラス質黒色安山岩」への修正を要する。④の石斧（第1図19）の材質は「ホルンフェルス」ではなくトロトロ石で、さらにこれに加えて「刃部再生剥片を含む調整剥片」についても「凝灰岩」ではなくホルンフェルスであることが明らかとなった。今後の研究の発展のためにここに明記しておく。なお蛇足ながら、黒曜石製の小型の調整剥片を細石刃と誤認した例は茨城県西泉田伏木遺跡の当該資料（大島・斎藤2015）にもみられる。

## （2）隆起線文土器の伴出の是非（第2図）

さて、神子柴石器群には土器がまま伴出し都合16カ所<sup>1)</sup>を数えるが、このほかに、次期の隆起線文土器を伴うと報じられた例として新潟県久保寺南遺跡と長野県中島B遺跡がある。

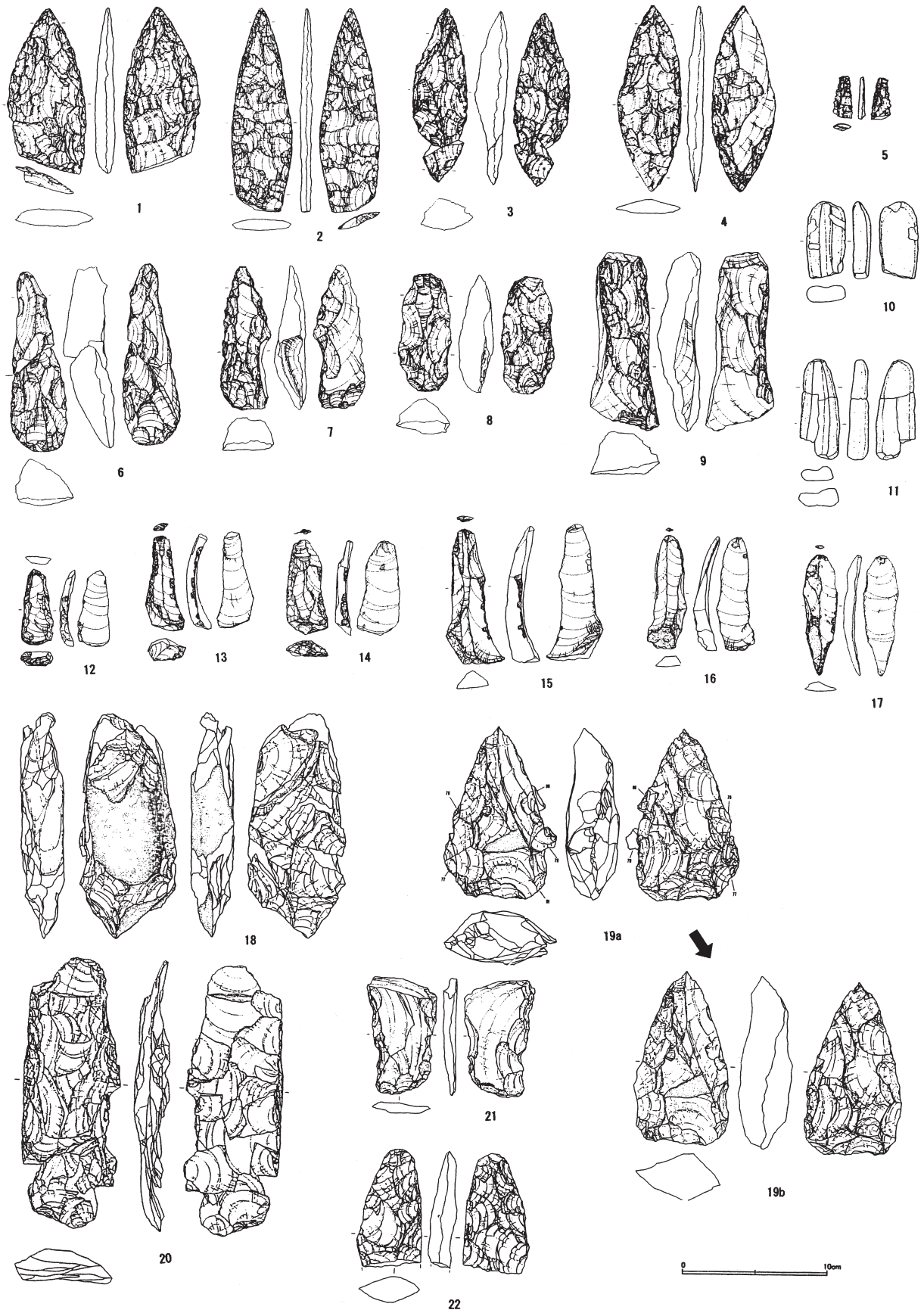
新潟県久保寺南遺跡では、大型尖頭器（第2図1～4）、石刃石器群（第2図12～17）、石斧（第2図6～9）に加え有溝砥石（第2図10・11）が出土しており、これらは一時期の所産とされていた（佐藤・笠井2001）。しかしながら、実見の結果、以下のとおり少なくとも三期に分かつ必要性があるとの結論に達した。ただし、石斧と石刃石器群については複数の時期にまたがる可能性を秘めており、時期の特定には至らなかった。なお、管見では有溝砥石については、一括性のあるものは縄文草創期後半に限られ、確実に草創期前半に位置づけられる例は今のところ無い（橋本2023c）。

- 1期 神子柴・長者久保文化期 大型尖頭器、（石斧）、石刃石器群（搔器・削器）
- 2期 草創期前半 隆起線文土器、（石刃石器群）、（石斧）、有舌尖頭器（破片）（第2図5）
- 3期 草創期後半 有溝砥石

長野県中島B遺跡では、多数の尖頭器（黒曜石製）の出土と打製石斧の製作痕跡が報じられていたが（大竹ほか1987）、実見の結果、報文の「打製石斧」は調整技術・形態の扁平度等の技術・形態学的な特徴からいずれも尖頭器の未成品であるとの結論に達した（第2図18～22）。素材は扁平礫で石器石材についてはこの地域では珍しくホルンフェルス（報文「粘板岩」）を主体としている。

以上の資料は、いわば土器に引きずられた時期決定の代表例といえる。すなわち石器からみると別の景色が見えるのである。同様の事例としては本ノ木遺跡が代表的であり、一面では、土器偏重の縄文時代研究のあらわれとも捉えられる。やはり、石器は石器、土器は土器なのである。

ちなみに、神子柴石器群に関する全資料の中で、一括性が確認されたものをみると、関東に当該資料が集中し、他地域では希薄であることが分かる。特に日本海側の地域（東北・北陸・中部方面）に混在例が多い（第1表）。その背景には日本海側の劣悪な土層の堆積環境がある。それにもかかわらず日本海側では一括性を前提としている場合がしばしばみられるが、今後はむしろ混在を念頭に置きつつ、関東のような土層の堆積状況が比較的良好な地域における研究成果との対比を図る必要があろう<sup>2)</sup>。



第2図 再検討を要する資料② (久保寺南遺跡1~17・中島B遺跡18~22)

### (3) その他 (第1図)

さて、神子柴石器群の出土は確認されていないが重要な関連資料として、千葉県林小原子台遺跡(A～Eブロック)の立川ロームⅢ層上面出土の石器群(三浦1986)がある。後年、見直しに着手した田村隆は種々の検討を経て、神子柴石器群と認定している(田村2003)。

しかしながら、総じて当該石器群には資料の一括性がなく上層の縄文早期(田戸上層・条痕文系)、中期(加曾利E式)の遺構・遺物との混在が危惧される。特に石斧・磨石類については、その可能性が高い。ちなみに、局部磨製石斧(第1図28)は使用痕(磨耗痕)のある打製石斧であり、早期前半(撚糸文期)の夏島貝塚例に酷似している(橋本2017)。

以上の上層の混入遺物を除くと、石器群の主体は、おおよそ石刃素材の搔器・削器(第1図20～27)ということになる。当該石器群の石器石材には黒色頁岩・黒色安山岩・東北頁岩が皆無であり、逆にトトロ石、ガラス質黒色安山岩、メノウ、久慈川の珪質頁岩(田代層)など茨城方面の石材が多い。このような技術形態学的特徴と石材組成を持つものとしてはホロカ型細石刃石器群(橋本2015)があり茨城方面の関連資料との整合性もある。なお、林小原子台の石器群には細石刃・細石刃核はないが、そもそもホロカ型細石刃石器群は細石刃の生産性が低く、なかには石刃素材の搔器・削器のみで構成される資料(群馬県笠懸北山遺跡)も散見される。また、このホロカ型細石刃石器群にしても、もともと類例が多い資料ではなく悉皆調査の結果を踏まえれば、むしろ少数派といえる(橋本2015)。

## 2 大型尖頭器の特質とその意味

### (1) 遺跡の分布 (第3～第6図)

遺跡分布は、巨視的には東高西低であるが、子細にみれば、特に関東地方に稠密であり、石材原産地を核としてその周辺に遺跡が集中する状況が窺える。これに対して近畿、中・四国は希薄である。このような近畿以西の尖頭器の僅少性については、すでに多数の先学(光石2001ほか)によって指摘されてきたところであるが、このことから西日本では、石材産地(二上山、岩屋、国分台、冠山)においても尖頭器の製作が低調であったことが類推される。すなわち消費地にしろ、製作地にしろその生産量は少ないのである。その一方で、東北と中部・東海の遺跡の空白が指摘されるが、これはみかけの現象であり、研究者人口の多寡と調査進度の遅れに起因するものと捉えられる。

### (2) 遺跡の性格と工程連鎖 (第1表)

遺跡の性格は、以下に示したように、大略、製作遺跡(原産地・中継製作地)、消費遺跡(狩場・漁場)に二分され、これにデポが加わる。ただし、複数の性格を兼ね備えた遺跡もまみられ必ずしも厳密に区分できるわけではない。なお、分析対象資料の内訳とその内容については、紙数の関係で別表(第1表)に取りまとめたので適宜参照願いたい。

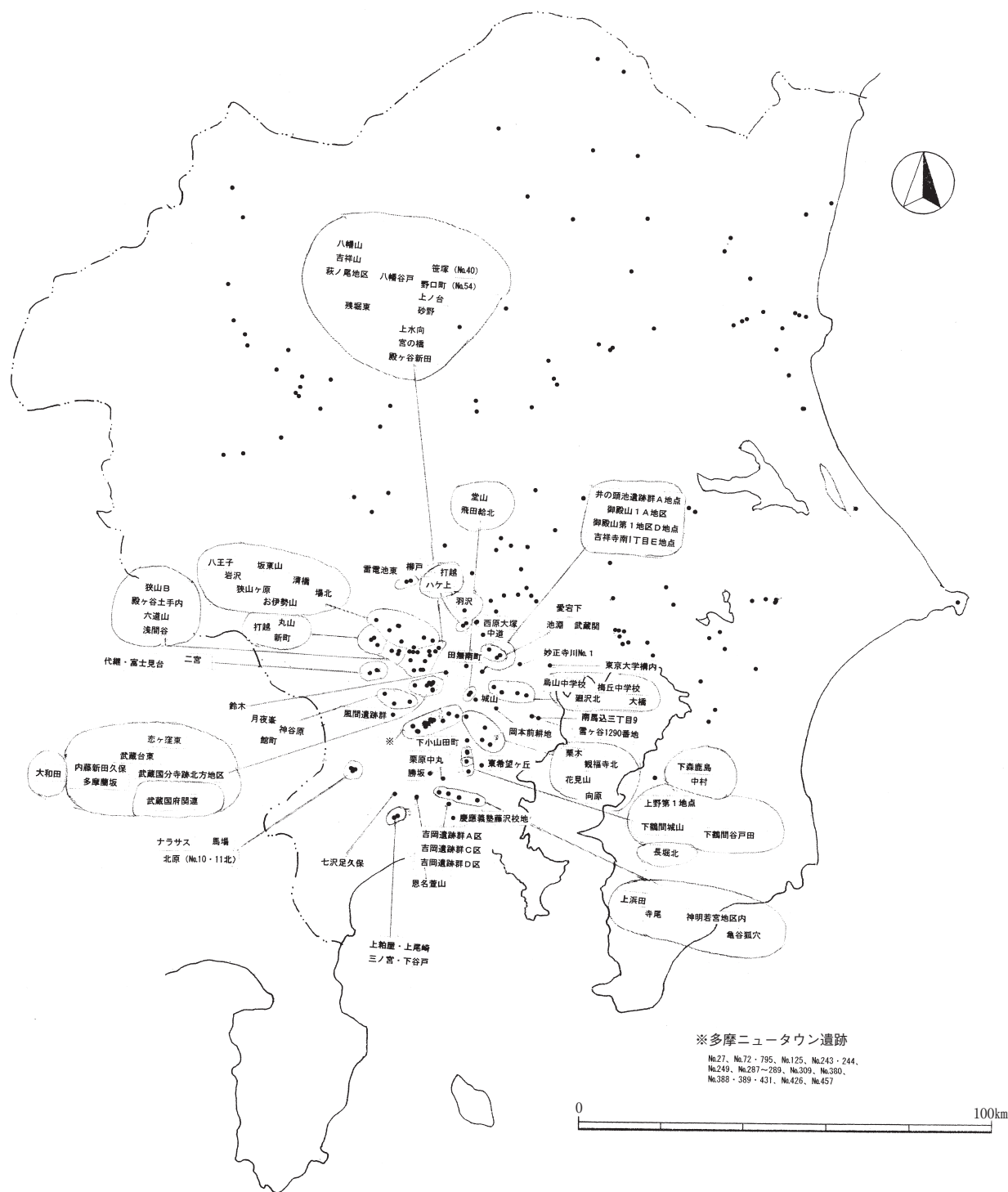
以下に掲げた製作遺跡はさらに原産地、中継製作地に二分される。前者は文字通り石材原産地ないしは石材採取地に所在し、主な遺跡としては多摩ニュータウンNo426第1文化層、下茂内、八風山遺跡群、男女倉、上野Aなどがある。製作遺跡では、概して大型尖頭器の完成品はほとんど無く製品率は低い。大半は製作途上の失敗品である。例えば、下茂内、八風山ではその大半は製作途上の失敗品(折損・接合)であり、無事完成にこぎつけた個体は、おしなべて他所へ搬出された模様である。

後者は原産地と消費地の間に位置し、消費地への製品の供給を目的として、石材産地から持ち込んだ









第6図 関東における神子柴石器群（大型尖頭器・石刃石器群）の遺跡分布②（西部）

はいかない（田中1990・2001）。例えば、氏が掲げた埼玉県西大宮バイパスNo.4遺跡（田代1986）の帰属時期については、①立川ロームIV層段階の片面調整の槍先形尖頭器が共存していること、②関東における神子柴・長者久保段階の高原山産黒曜石製大型尖頭器は資料的に限られており（高原山遺跡群剣ヶ峯地区遺跡が唯一）、地元でも大きな広がりを見せていないこと、③当該資料は大きさと技術的特徴から尖頭器の母型と捉えられ、むしろ、より古期の栃木県佐野市上林遺跡第I文化層出土の有樋尖頭器（出居2004）

第1表 分析対象資料集計表（数値は遺跡数）※各遺跡の詳細については橋本2025を参照されたい

地域	遺跡数	分析対象	発掘調査例（*印は一括性の検討要）						遺構外単独出土（発掘調査例）						採集資料				
			A	B	C	D	E	F	大型尖頭器(累計)			石刃石器群							
									計	1点	2点	3点	計	単独	計	石刃石器群	計		
関東	茨城県	22	12	後野A	西泉田伏木				馬場尻A	3	7			7	0	砂沢堂ノ下(B)、上笹目(F)	2		
	栃木県	21	14	川木谷	片府田富士山			高原山遺跡群剣ヶ峯地区、宮原		4	8			8	2	戸木内、市ノ塚	0		
	群馬県	21	14			荒砥三木堂、小島田八日市*、田島*		房谷戸、堤*		5	8			8	1	吹屋三角	0		
	埼玉県	34	30					羽沢		1	24	1		25	4	西原、松木、八ヶ上、打越第6地点	0		
	千葉県	26	17		円妙寺			矢船Ⅱ、西の台、復山谷、六通神社南*		5	12			12	0		0		
	東京都	65	41			岡本前耕地*、井の頭池遺跡群A地点*、武蔵国分寺跡北方*、多摩ニュータウンNo27、多摩ニュータウンNo72・795・796		田無南町、狭山B*、代継・富士見台、丸山、多摩ニュータウンNo388・389・431、多摩ニュータウン426		11	23	3		26	4	武蔵台東、恋ヶ窪東、多摩ニュータウンNo380、多摩ニュータウン426	0		
	神奈川県	30	26	寺尾、上野第1*		吉岡遺跡群A区		風間遺跡群、勝坂(第45次)、下森鹿島第2文化層*、下鶴間城山、長堀北第Ⅱ文化層、栗原中丸第Ⅰ文化層、北原、馬場、ナラサス		12	10	2	1	13	1	東希望ヶ丘	0		
東北	青森県	7	6	幸畑(7)、長者久保、赤平(1)、大平山元Ⅰ				大森勝山		5				0	0	相野山(B)	1		
	秋田県	3	1					綴子		1				0	0				
	岩手県	3	1					早坂平		1				0	0				
	宮城県	1	0							0				0	0				
	山形県	16	6	上野A	月山沢J	八森*		高松Ⅱ、弓張平B(第3・4次)		5				0	0	※	0	長岡山	1
福島県	8	4			学壇*			林口		2				0	0	0	上総屋敷(B)、大神(B)	2	
北陸	新潟県	32	19	上ノ平C、吉ヶ沢B、久保寺南*、正面中島	荒沢、大刈野	寺田上A		貝野沢田、雨池A		9	7	2		9	0	菅谷(B)	1		
	富山県	8	3					直坂Ⅱ		1	2			2	0	0	0		
	石川県	1	0							0				0	0	0	0		
	福井県	1	0							0				0	0	0	0		
中部	長野県	53	23	唐沢B、種子柴	下茂内、丘中学校*		七ツ栗*	横倉、千苺、中島B*、北の城、男女倉、鷹山、浪人塚下	日向林B	13	6			6	1	南曾峯	1	柿沢(B)、上和沢(B)、小鍛冶原(B)	3
	山梨県	3	3				神取*			1	2			2	0	0	0		
	岐阜県	18	3		宮ノ前	大林*				2				0	0	0	上海上初屋野(C)	1	
	愛知県	3	1							0	1			1	0	0	0		
	静岡県	15	14							0	9	3	2	14	0	0	0		
近畿	三重県	1	1				上ノ広*			1				0	0	0	0		
	滋賀県	3	2							0	2			2	0	0	0		
	奈良県	2	1					勢野東		1				0	0	0	0		
	京都府	3	2			引地城跡*				1				0	1	0	0		
	大阪府	1	1							0				0	0	0	0		
	和歌山県	0	0							0				0	0	0	0		
	兵庫県	3	1							0	1			1	0	0	0		
中国	鳥取県	4	1							0	1			1	0	0	0		
	島根県	1	1							0	1			1	0	0	0		
	岡山県	0	0							0				0	0	0	0		
	広島県	2	2					冠遺跡群		1	1			1	0	0	0		
	山口県	1	1							0	1			1	0	0	0		
四国	徳島県	0	0							0				0	0	0	0		
	香川県	5	5					国分台*、城山*		2	2	1		3	0	0	0		
	愛媛県	1	0							0				0	0	0	0		
	高知県	2	2							0	2			2	0	0	0		
計	420	258	17	10	13	4	41	2	87				145	15		11			

A	大型尖頭器 + 石刃石器群 + 石斧
B	大型尖頭器 + 石刃石器群
C	大型尖頭器 + 石斧
D	石刃石器群 + 石斧
E	大型尖頭器（遺物集中地点等の遺構に伴うもの）
F	石刃石器群（遺物集中地点等の遺構に伴うもの）

※越中山遺跡群は除外

との関連性が考慮されることなどを勘案すると、帰属時期は立川ロームⅣ層段階である可能性が高い<sup>4)</sup>。また、神奈川県台山遺跡第Ⅰ文化層では尖頭器3点が出土しているが、分布状況は散漫であり報じられたとおり互いに時間差がある。ちなみに、1点の本ノ木型尖頭器、他の2点は木葉形尖頭器である(麻生1988)。

このようにデポの認定にあたっては慎重を期すべきと考えるが、こと大型尖頭器に関しては、時としてデポが介在したようである。神子柴や唐沢Bなどのデポが神子柴石器群の全体像を反映する所以である。

### (3) 石器石材の特質 (第7～第9図)

大型尖頭器の主な石器石材としては、東北頁岩、下呂石、サヌカイト、黒曜石、ガラス質黒色安山岩、チャート、黒色頁岩、トロトロ石、ホルンフェルス、流紋岩がある。先に述べたように、いずれも石材原産地を核として分布しているが、列島全体を俯瞰すると、一地域にとどまらず広域に広がったもの(以下「広域石材」)と、あくまで地域内にとどまるもの(以下「地域石材」)に二分される。

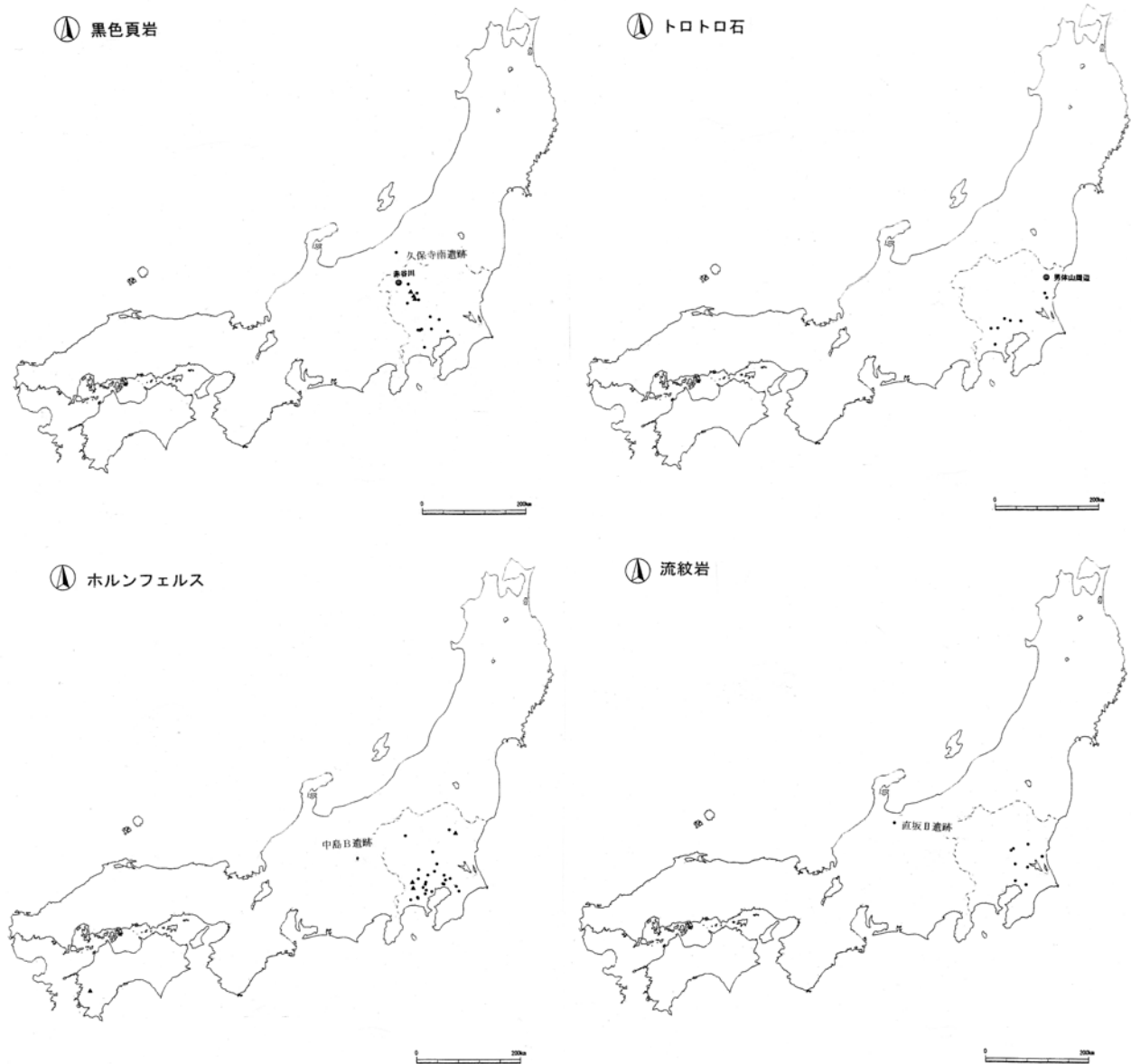
広域石材には、東北頁岩、サヌカイト、下呂石、黒曜石がある。東北頁岩は原産地である東北地方日本海側に集中し、関東東部・中部(日本海側)、果ては出雲方面<sup>5)</sup>に至るまで関連遺跡が分布している。

サヌカイトはほぼ近畿・中四国に局限されるが、飛び地例として千葉県六通神社南遺跡(奈良県二上山産)がある。下呂石は西方よりも東方に大きな広がりを見せ、東京都調布市城山遺跡<sup>6)</sup>(竹崎1982)、や千葉県六通神社南遺跡(島立ほか2003)に波及している。またこのほかに、天竜川流域の長野県松川町北の城遺跡(宮沢ほか1972)では大型尖頭器の母型4点からなるデポが発見されており、下呂石の流通を考究するうえで注目される。さらに黒曜石製の中で特筆すべき事例としては新潟県十日町市干溝・三条市荒沢両遺跡の青森県深浦産の黒曜石製大型尖頭器(佐藤2021、建石ほか2008)、また図示はしていないが、このほかに新潟県阿賀町吉ヶ沢遺跡B地点の高原山産黒曜石(石核)がある(澤田ほか2004)<sup>7)</sup>。

一方、地域石材としては、ガラス質黒色安山岩、チャート、黒色頁岩、トロトロ石、ホルンフェルス、流紋岩がある。このうちガラス質黒色安山岩の石材産地はほぼ列島全体にみられ、主要な産地としては、西から広島県冠高原、鳥取県麻畑(白石・藁科2002)、北陸(福井県法恩寺山、石川県能登、富山県、新潟県関田山地)、長野県八風山、関東(群馬県武尊山、栃木県武子川・姿川、茨城県大洗海岸周辺、神奈川県箱根)などがある。このほかのチャート・黒色頁岩・トロトロ石・ホルンフェルス・流紋岩の関連遺跡はほぼ関東一円にほぼ局限されるが、その中でもトロトロ石は比較的広域に流布している。トロトロ石は茨城県北部に聳える男体山起源のデイサイトであり、現在でも付近の久慈川水系で在地のメノウ・珪質頁岩とともに採集可能である。関連遺跡については、かつては茨城・千葉方面に偏在するといわれていたが(柴田1994)、その後、さいたま市西大宮バイパスNo.4遺跡(田代ほか1986)<sup>8)</sup>・下野田本村遺跡(山田ほか2010)、東京都東村山市野口町遺跡(野口2001)、神奈川県座間市栗原中丸遺跡(大上・鈴木1984、鈴木1999)等で大型尖頭器の出土を確認した。トロトロ石の割れ口は暗褐色で細粒緻密でほぼ無斑晶であるが、出土遺物の表面が著しく風化し粘土質であることからこの名があり、関東の考古学界ではこの俗称が一般化している。ただし、一部に「ガラス質デイサイト」への言い換えを推奨する向きもある(柴田2008)。

総じて、大型尖頭器の石器石材に関しては、その大半が地域石材であり広域石材は比較的少ない。また、先に述べたように、石器石材は広域・地域の別を問わず遠方には製品の状態で搬出される傾向にあり、その中には先の六通神社南のように石材産地から約400km超える超広域例(綿貫2011)も垣間見られる。



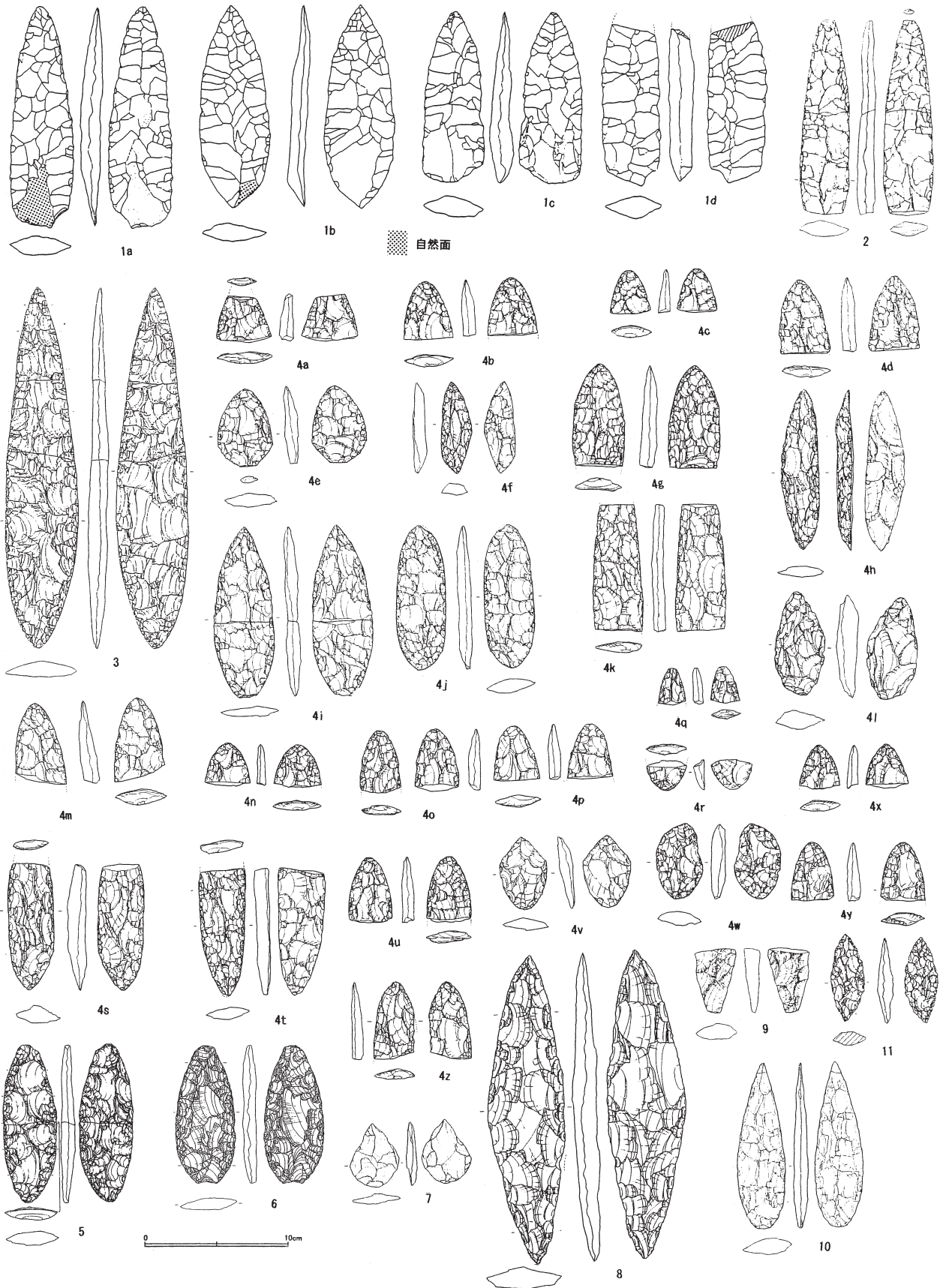


第8図 大型尖頭器の石材別分布状況②

### 3 神子柴石器群の特質とその意味－神子柴石器群の比較検討－

#### (1) 分布特性 (第10・第11図)

大型尖頭器の遺跡分布が東高西低であることはすでに述べた。石斧もほぼ同様の分布傾向を呈しており、とりわけ関東では70遺跡(132個体)を数え、新潟方面ともに核地帯の一角をなしている。また、中国地方東部および四国東部の分布の空白からこの付近を境とした東西の文化圏の存在が想起される。すなわち中国地方西部・四国・九州方面が朝鮮半島を経由した大陸系、あるいは南方系であるのに対して、中国地方東部以東は北方系の影響下にあったものと推定されるのである。このことは東側の分布域が、旧石器・縄文時代を通じて北回りの東北頁岩製石器(旧石器時代の東北系ナイフ形石器(橋本2023d)・北方系細石刃石器群(橋本2020)や縄文時代草創期後半の両面加工石器群や木葉形薄型尖頭器等)(橋本2021・2023b)と重なることから補強されよう。



長野県北の城(1)・神子柴(3)、東京都城山(2)、千葉県六通神社南(4a~4g:下呂石、4h~4z:サヌカイト)、新潟県荒沢(5)、干溝(6)、神奈川県栗原中丸(7)、東京都野口町(8)、埼玉県西大宮バイパスNo.4(9)・下野田本村(10)、島根県宮ノ前(11)

第9図 広域石材/地域石材の代表例

一方、石刃石器群の遺跡分布は東北・北陸ではその製作痕跡（高い製作率）をとどめるが、全体的に希薄でありその出現率は低い。あたかも主体的な石器ではないかのようであるが、この現象はみかけの可能性が高い。なぜならば石刃石器群は管理的な色彩が濃厚であり、その場には残さず再加工により徹底消費されており、かつ彫搔器に代表されるように多目的性（機能の複合）や可搬性も兼ね備えているからである。また、希薄ながらも関連遺跡は関西方面にまで広がり石斧や大型尖頭器との分布の重なりも生じていることから、本来、石刃石器群は大型尖頭器と共存し、これに時として石斧を伴うようである。

また、さらに付言すれば、大型尖頭器、石刃石器群、神子柴型石斧の分布状況からは、神子柴石器群が北方系の石器群であり、神子柴石器群の出自や系統にかかわる重要な事実を提供していることは明らかである。この中でも特に、石刃石器群（東北頁岩主体）は、石斧や大型尖頭器に比べて時間的な限定性があり、神子柴集団の動態を探るうえで良い指標となる。さしずめ神子柴石器群の南限＝石刃石器群の南限（彫搔器）といえるのである。また、東北・新潟北部、特に本州の北端の青森県下では、基本的に石刃石器群を伴っており、当該石器群の核地域である北海道方面との強固なつながりが窺える。なお、西日本における神子柴石器群の衰退については、東日本との局所的な環境の違いによる生業形態の差を反映したものと考えているが、具体的な検討は今後の課題である。

## （2）立地と生業

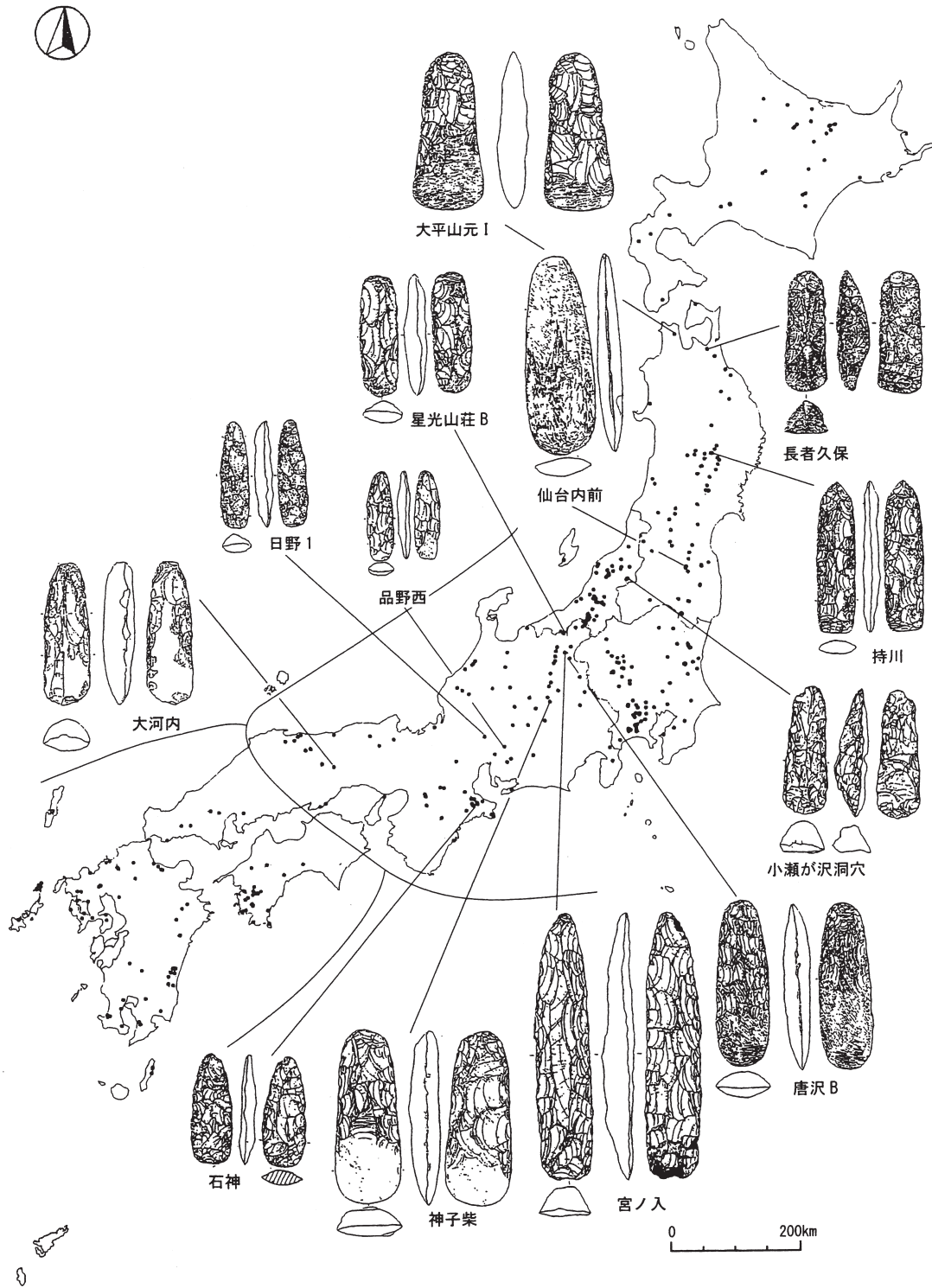
三者の立地を比較すると、大略、石斧は山地・丘陵<sup>9)</sup>、石刃石器群は寒河江川（上野A）、阿賀川（上ノ平遺跡C地点、吉ヶ沢遺跡B地点）、那珂川（後野A、馬場尻A、川木谷）、信濃川（久保寺南、正面中島）、天竜川（神子柴、小鍛冶原）、神通川（宮ノ前）、淀川（長岡京跡藤ノ木地区、郡家本町）などの、大河川の河岸段丘上にその多くが立地しているのに対して、今回、検討した大型尖頭器は、立地の如何を問わず広域に展開している。

このことはそれぞれの機能・用途の差を如実に反映しているものと捉えられる。すなわち、石斧は樹木の伐採・加工具、石刃石器群は漁撈具など特定の機能・用途に限定されるのに対して、大型尖頭器に関しては、島立桂が指摘したとおり、単なる「槍の穂先」ではなく、「研究初期から短剣やナイフなどの機能も想定されてきた」のである（島立2014）。このように大型尖頭器については用途の汎用性が想定されてきたのであり、その限りにおいては、これまでの学界の一部で使われてきた「槍先形石器」という用語（由井ほか1992、島立2014ほか）は言い得て妙である。消費地において大型尖頭器の単独出土（＝機能の集約）がまま見られる所以である。

## （3）製作と消費

### ●技術特性（系譜）

神子柴型石斧は技術面では両面加工石器（biface）の系譜にあり、器面のほぼ全体にあたかも両面加工の尖頭器を彷彿とさせるような精緻な加工が施されており、自然面や主要剥離面を残すような手抜きは例外的である。この中には尖頭器と見紛うばかりの形態もあり、特に、東北的な尖基・扁平で加工が精緻なものは、その最たるものといえる。このような旧来の技術の踏襲と応用は縄文早期以降の石斧には見られない大きな特徴である。以上の石斧の技術的特徴を念頭に置けば、大型尖頭器と石斧は両面加工石器の系譜をひくものであるといえそうである。またこれに加えて石刃石器群に関わる円盤状石核<sup>10)</sup>にしても石刃石器群の素材生産にとどまらず、最終的には大型尖頭器の母型ともなり得たものと考えられる。このことは、まさしく石刃と両面加工石器製作の技術的融合といえよう（橋本2025）。



第10図 旧石器時代終末～縄文時代草創期の石斧関連遺跡の分布図（全国）橋本2024bを一部改変

さらに、三者ともに折損後の再加工や刃部の更新が頻繁に行われ、他の時期に比べ母型としての意識が高い。そして、その背景には北方系細石刃石器群以来の技術的系譜（両面加工石器の製作と消費）が考慮される。

●石器石材

先に述べたように大型尖頭器の石材はその多くが地域石材であり広域石材は比較的少ない。石斧にも同様



デボが介在する場合があることは既に述べた。このうち中継製作地は大型尖頭器に顕著にみられる。石器の搬入形態は製品・母型・未成品・素材・原石などさまざまであるが、中継製作地では母型ないしは素材、デボや消費地では母型や製品が基本となっている。また、消費地における単独例には完成品が多く、その傾向は特に遠来のものに顕著である。

このように大型尖頭器は需給の多寡と機能に根ざした消耗度の高さから、地域内の石材産地を核として大量生産と製作地・中継製作地・消費地という遺跡間のネットワークの構築により、製作時におけるリスク（失敗）が回避され、これによって安定供給が図られていたものと考えられる。その背景には大型尖頭器の需給の多寡と機能に根ざした高い消耗度がある。

これに関連して小菅将夫は「尖頭器製作とその遺跡連鎖構造の問題を検討するには、まず、運搬石材の重量削減と製作時の欠損に対するリスク軽減などの課題を考慮する必要がある」と述べているが（小菅2018）、同感である。

### ●東北頁岩製石器の南下－運搬仕様と運搬痕跡が物語るもの－

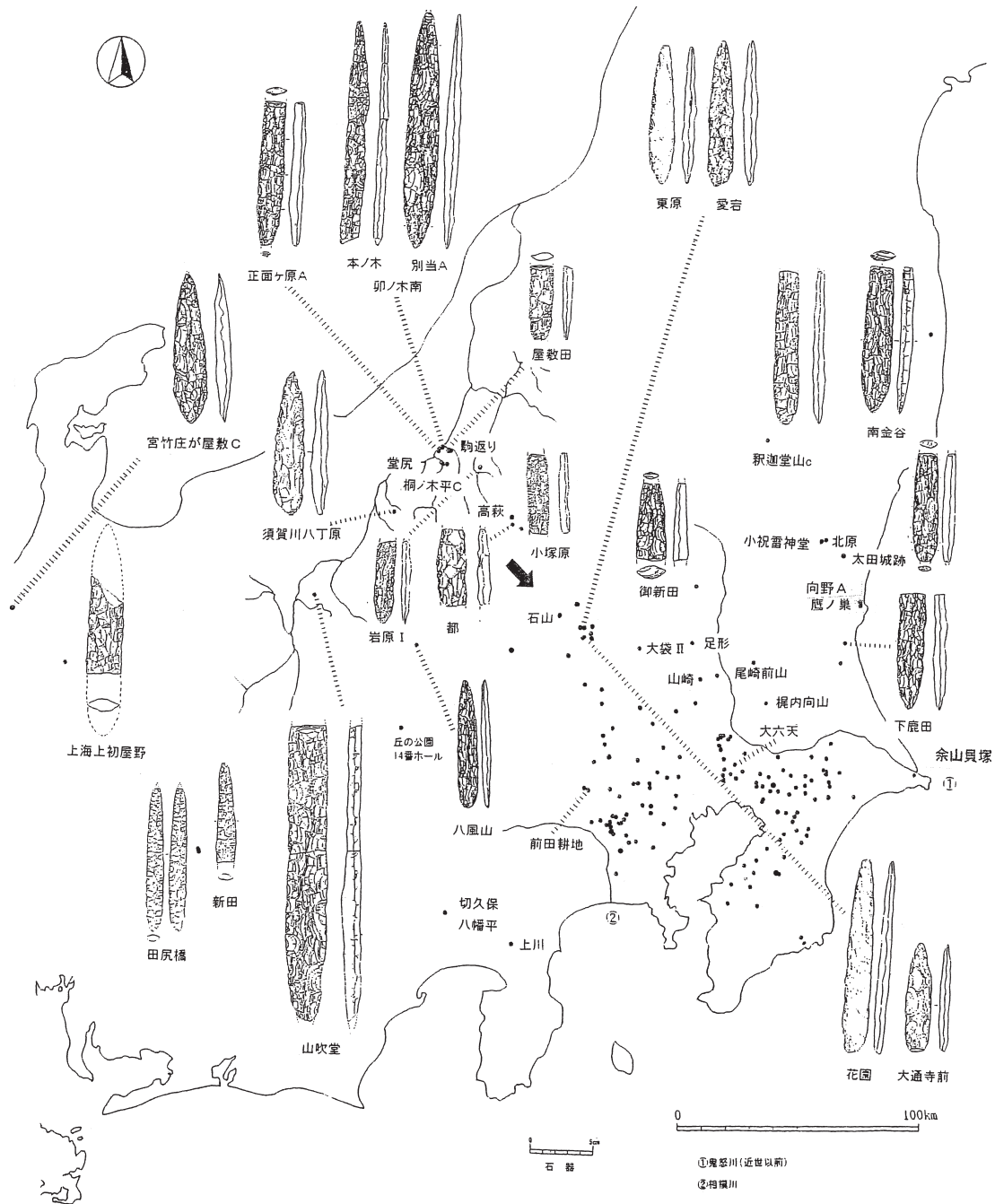
広域石材である東北頁岩製の石器は、関東には未成品・母型や素材ではなく、東北地方から製品として搬入されている。したがって、関東の出土資料は、製作地の東北地方に比べ完成品本来の姿が反映されている可能性が高い。またこれらは単独出土を基本とするが、このことは、さしずめ多機能・多目的な当該資料の機能的性格を表しているのであろう。そして、南下するにしたがって、地域石材に徐々に置き替わる一方で、東北頁岩製石器はリダクションが進行し、大型尖頭器や石刃石器群は小型で非対称形のものへと形態が変化したようである。

このような一連の広域活動の結果、東北地方では製作地、複合出土、及び未成品・母型・失敗品、関東以西では消費地、単独出土、及び製品というキーワードで括られ、地域的に互いに対峙している。その背景には原産地と遺跡（消費地）との緊密なネットワークがあるものと考えられる。なぜならば大型尖頭器のような両面加工石器の製作には、大型の素材が必要であり、これに可搬性を加味すれば、勢い石器石材の原産地又は採取地での母型の量産が前提となるからである。

翻って、東北頁岩製石器の装備には可搬性、耐久性、汎用性、及び生産性等の移動や運搬に適した仕様が求められている。このようないわば運搬仕様には、これに留まらず製品の軽量化（薄手・扁平）による大量運搬、さらに薄造りに堪えうる石材の選択（強靱な物性）も加わる。

これに対して地域石材製の石器は、分布域が相対的に狭く非回帰で定着化のきざしが窺える。しかしながら、冒頭にも記したように、装備に関しては基本的には広域石材製石器を踏襲している。このため東北頁岩製石器の本来の装備の内容が、神子柴遺跡、唐沢B遺跡などの良好な一括資料に投影されている可能性が高い。

さて、この運搬仕様に対応するものとして運搬痕跡がある。運搬痕跡とは、澤田敦によって命名され石器の表面変化であり、岩石種の別を問わず広く適用される。氏によれば、石器に残された各種痕跡のうち、使用痕、刃部再生痕跡、着柄痕と並ぶ消費痕跡の一種とされる（澤田1997・2003）。こうした痕跡の中では、多段階表面変化（「二重パティナ」）が特に注目される（鈴木2002）。このことについて発案者の鈴木宏行は、北海道遠軽町上白滝5遺跡出土の彫器・舟底形石器に関して、多くの細かい傷のある光沢のない素材面と、傷がなく光沢のある調整加工面との傷（線状痕）の分布量の違いに気づき、前者を素材の運搬時、後者を当該遺跡もしくは近隣で生じたものと仮定した。さらに、これに黒曜石原産地推定の結果を踏まえて、人々



第12図 本ノ木型尖頭器の遺跡分布 橋本2024aを一部改変

の石材原産地への回帰行動を想定した。仮に、この「二重パティナ」の成因が、このような回帰的な移動結果と位置づけられるのであるならば、大型尖頭器にも適用可能と認識され、特に運搬痕跡が鮮明な黒曜石製のものに有効と考えられる。時期的には異なるものの、くだんの西大宮バイパスNo.4 遺跡の出土尖頭器(母型)の表裏にも同種の痕跡がみとめられるが(田代ほか1986)、おそらくこのことと無縁ではなからう。

(4) 本ノ木型尖頭器の登場と地域性の萌芽(第12図・第2表)

神子柴・長者久保文化期には、関東・中部には局所的に特異な石器が出現する。すなわち、本ノ木型尖頭器である。当該尖頭器の詳細については、冒頭に記したようにすでに数回にわたり論述したのでそちらに譲るが(橋本2012ほか)、あえて付言すれば、①神子柴石器群の関連遺跡との分布の重なりがあり、か

つ北方系石器群の南下の末端にあたる本州中央部で顕著にみられること、②神子柴石器群の技術基盤である石刃技法と遠来の東北頁岩がほとんど姿を消していること、③大型尖頭器の密集地帯であるのにもかかわらず、本ノ木型（197か所：橋本2026）との重複例はわずか9カ所（長野県八風山遺跡群、埼玉県向原遺跡、千葉県殿台遺跡・東平賀貝塚・畔田川崎東遺跡・東峰御幸畑東（空港No62）遺跡、東京都武蔵国分寺跡遺跡北方地区・武蔵台東遺跡、神奈川県吉岡遺跡群C区）にすぎず、共存関係の可能性が低いことなどが指摘される（橋本2023a）。

以上の諸相は、本ノ木型が神子柴石器群に後続する石器群であることへの補強材料となろう。また同時に本ノ木型が有舌尖頭器の先駆形態であることを加味すれば、関東・中部に局所的に分布する本ノ木型の登場は地域性のあらわれと捉えられよう。

## おわりに

雑駁ながら、神子柴石器群を特徴づける大型尖頭器の検討を経て、大型尖頭器・石刃石器群・石斧の相互比較により当該石器群の全体像を概観した。その結果、神子柴石器群の特質については、大略、①分布特性から北回りの石器群であること、②石材産地を核とした石材需給の緊密なネットワークが構築されており、このシステムが集団の広域移動を支えていたこと、③遊動的要素（石刃石器群の拡散と広域石材の使用）と定着的要素（大型尖頭器・石斧の製作と地域石材の使用）という二面性を有すること、④石刃石器群の再加工と素材生産を担う円盤状石核による徹底消費（素材生産にとどまらず大型尖頭器の生産も担い効率的で可搬性がある）、⑤北方系細石刃石器群に端を発する両面加工石器の系譜に属し、母型としての意識が高いことなどが指摘できた。

しかしながら、本稿はあくまでも出発点であり、生業をはじめ残された課題はあまりにも多い。ついては、今後も資料の収集・分類を経て法則性を探る作業に邁進したい。

なお今回は、紙数の関係で参考文献は最小限にとどめた。ただし、神子柴石器群のうち大型尖頭器と石刃石器群の資料一覧及び関係文献については、石刃石器群に関する検討結果とともに、すでに別稿（橋本2025）に記したので、そちらをご参照いただければ幸いである。

謝辞 本稿を草するにあたり以下の方々からご指導・ご協力を賜った。記して深甚の謝意を表します。

渡辺文彦、鈴木秋平、小菅将夫、鹿又喜隆、小川慶一郎、島立桂、萩野谷悟、森嶋秀一、吉朝則富、奥義次、須藤隆司、西井幸雄、麻生順司、藤原妃敏、笠井洋祐、佐藤雅一、小熊博史、渋谷孝雄、白石浩之、中村由克(順不同・敬称略)。

## 註

- 1) 当該期の土器の関連遺跡（本ノ木型を除く）としては、青森県大平山元・同赤平（1）、新潟県大刈野、長野県東裏、同日向林B、同下茂内、茨城県後野A、同馬場尻A、群馬県荒砥三木堂、東京都井の頭池遺跡群A地点、同代継富士見台、同多摩ニュータウンNo72・795・796、神奈川県勝坂（第45次）、同寺尾、同上野第一、同北原No10・11北がある。
- 2) 日本海側における混在の典型例としては、山形県酒田市八森遺跡（佐藤ほか2003）と福井県勝山市猪野口南幅遺跡（宝珍ほか2000）がある。ともに包含層出土であり八森例については、4期にわたる石器群（国府系石器群、東山系ナイフ形石器の一群、北方系細石刃石器群、神子柴石器群）が、猪野口南幅例については国府系石器群と北方系細石刃石器群が混在していた。詳細は拙稿を参照願いたい（橋本2020・2022）。
- 3) 母型とは仕上げを前提とした完成間近の状態を指す。これに対して未成品と報じられている資料は、その大半が失敗品と同義であり、何らかの理由で製作が途絶したものを言い、その多くがその場に廃棄されている。特に石材原産地に

第2表 関東における旧石器時代終末期から縄文時代草創期（「旧石器・縄文移行期」<sup>1)</sup>）の石器変遷案（橋本2023cを一部改変）

時代 <sup>2)</sup>	時期	気候・区分	出土層準 (相模野)	主な 刺突具	住居跡	主な遺物 <sup>3)</sup> (●有 ▲少 ×無)						石刃技法	両面加工 石器	東北頁岩	西部 <sup>4)</sup>		出土層準 (赤城)	東部		集団の 動態
						土器	石斧	石鏃	石槍	彫搔器	搔器				主な立地			主な立地		
															山地・丘陵等	台地等		山地・丘陵等	台地等	
縄文時代草創期	後半	4期 (石鏃)	新ドリラス期 (「寒の戻り」)	漸移層 ～富士黒土層下部	石鏃	▲	●	●	▲	×	●	×	●	石鏃、両面加工石器（主に神津島産黒曜石）、木葉形薄型尖頭器		漸移層 ～表土	石鏃、両面加工石器（主に東北頁岩製）、木葉形薄型尖頭器		やや遊動	
	前半	3期 (有舌尖頭器)			有舌尖頭器	▲	●	×	▲	×	×	×	×	×	有舌尖頭器		一嶽田基兵衛山南（空港No12）ほか（単独出土多数）			定着
後期旧石器時代	更新世	2b期 (槍と斧)	寒冷→温暖 (ベリング期／古ドリラス期／アレレド期)	L1S上部	石槍	▲	▲	×	●	×	▲	×	×	本ノ木型尖頭器		古利根川・荒川筋	本ノ木型尖頭器		やや定着	
		2a期 (槍と斧)			植刃槍・石槍	▲	▲	×	●	×	▲	×	×	×	前田耕地、吉岡遺跡群B・C区ほか（単独出土多数）		南大溜袋、元割ほか（単独出土多数）			
	後期	③-1	③-2	②	UG(立川ローム上部ガラス質火山灰)	UG / As-YP (浅間板鼻黄色軽石)	As-YP 直上	石斧・尖頭器等	尖頭器等	細石刃核、細石刃、石槍、石斧、土器	勝坂、上野第1、長堀北、狭山B (少数)	単独出土多数	As-YP 直下	ホロカ型	ホロカ型/野岳・休場型	As-YP 直下	削片系	遊動		
		③-1	③-2	①															細石刃核、細石刃、石槍、土器	尖頭器等
1期 (細石器) (後半)	寒冷	L1S下部 ～B0中部	植刃槍	×	×	×	×	×	×	東部	▲	東部	東部	ホロカ型	ホロカ型/野岳・休場型	As-YP 直下	削片系	遊動		

注 1) 全体を俯瞰すれば、旧石器・縄文移行期の資料群には、旧石器時代の遊動的要素（移動に適した両面加工石器群、北方系の石刃石器群の伝統、広域石材の活用）と縄文時代の定住的要素（堅穴住居、土器・貯蔵、地域石材の活用）を併せ持つという、過渡期特有の性格がよく表われている。また、旧石器時代の終末（2期：神子柴石器群）には出現期の土器が散見されるが、より古期の旧石器時代の文化伝統を重視すれば、真の意味での縄文化（定住的要素の明確化）は、縄文時代草創期以降の出来事と認識せざるを得ない。  
 2) 各期は必ずしも画然と区分できるわけではない。過渡期には前後の文化要素が重なる場合がある。  
 3) 時期を問わず石斧は山地・丘陵に、刺突具は平野部に主として分布。  
 4) 西部は東部に比べ狭小で山がちであり、東部に比べ局所的な環境を捉えにくい。

においてその傾向が顕著であり折損例（接合例）がまみられる。母型は比較的少数派であり神子柴をはじめ、北の城、小鍛冶原、宮原などデポとの関連性が強い。また、デポの性格を考えれば、デポには未成品は無く、母型や完成品を主体としていることは言うまでもない。

- その意味で筆者は、白石浩之の年代観（白石1997）に賛同するものである。
- 中型ではあるが鳥根県松江市宮ノ前遺跡の遺構外出土資料（第9図11）（柳浦ほか2006）がこれに該当しよう。
- 須藤隆司氏からご教示いただき、調布市教育委員会のご厚意により、過日、確認したところである。
- なお黒曜石製尖頭器の関連資料としては、このほかに隠岐産（鳥取県中山石立）、信州系（長野県笹付・柿沢・神子柴・池ノ平・鍛冶原・男女倉・鷹山・浪人塚下・広畑、栃窪岩陰、東京郡浅間谷）、高原山産（高原山遺跡群剣ヶ峯地区）があり、小鍛冶原や神子柴などのデポも介在する。なお従来、黒曜石製とされていた長野県上和沢例（森嶋1967）については、実見の結果、東北頁岩（チョコレート頁岩）製であることが判明したので、ここに付記しておく。
- 遺構外出土資料（報文第12図21）。なお、当該資料と黒曜石製尖頭器の一群が互いに時期を異にすることは言うまでもない。
- このうち石斧については拙稿で解説したので、詳細はそちらを参照願いたい（橋本2017）。
- 関連遺跡としては神子柴のほか、片府田富士山、上野A、正面中島、吉ヶ沢B地点、上ノ平C地点がある。
- 白石浩之によれば「西日本では兵庫県鉢伏高原遺跡第7地点でも頁岩製の神子柴型石槍が出土している」という（白石2018）。本例は、長さ10.9cmを測る両面加工の大型尖頭器であるが、実見により、神子柴・長者久保期の所産ではなく、

上半部が膨れ下半部が窄む縄文前期特有の石槍（報文の図は天地逆）であることが判明した（山根・大下1999、萩野谷・橋本2024）。時期は異なるものの新潟系と推定される東北頁岩が用いられている点に興味深い。

引用参考文献

- 阿久澤智和 2018 「北関東地方の様相」『岩宿フォーラム2018/シンポジウム 大形尖頭器の技術組織 - 岩宿時代社会の終焉を探る - 予稿集』岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会 pp.38-47
- 麻生順司 1988 『神奈川県大和市台山遺跡発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 出居博 2004 『上林遺跡』佐野市教育委員会
- 上野修一・荒川竜一 1993 『第45回企画展 選ぶ・割る・磨く - 旧石器時代から古墳時代までの人と石のかかわり -』栃木県立博物館
- 後野遺跡発掘調査団 1976 『後野遺跡』勝田市教育委員会
- 大上周三・鈴木次郎 1984 『栗原中丸遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター
- 大島孝博・斎藤和浩 2015 『西泉田伏木遺跡 山崎遺跡群』茨城県教育財団
- 大竹憲昭ほか 1987 「中島B遺跡」『中央道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 I（本文編）』長野県埋蔵文化財センター pp.352-436
- 大森隆志 2009 「第二部 寒風台遺跡出土石器再整理報告」『関場遺跡第2地点出土旧石器資料報告 寒風台遺跡出土石器再整理報告』松戸市立博物館 pp.15-22
- 及川穰・池谷信之・高橋瑠美・鴨志田篤二・川崎純徳・安蒜政雄 2008 「茨城県ひたちなか市後野遺跡の研究 - A地区黒耀石製剥片について -」『日本考古学協会第74回総会研究発表要旨』 pp.20-21
- 小菅将夫 2018 「両面加工尖頭器の製作と道具」『岩宿フォーラム2018 シンポジウム大形尖頭器の技術組織 - 岩宿時代の終焉を探る -』岩宿フォーラム実行委員会・岩宿博物館 pp.18-22
- 近藤尚義 2000 「尖頭器の剝離面に残された『痕跡』について」『長野県立歴史館研究紀要』6 長野県立歴史館 pp.13-24
- 佐藤禎宏ほか 2003 『八森遺跡』八幡町教育委員会
- 佐藤信之 2024 「新潟県津南町における石材調査と分析事例について」『考古学ジャーナル』798 ニューサイエンス社 pp.5-10
- 佐藤雅一・笠井洋祐 2001 『久保寺南遺跡』中里村教育委員会
- 佐藤雅一 2021 「信濃川流域における神子柴系石器群の消長」『新潟考古』第32号 新潟県考古学会 pp.11-30
- 澤田敦 1997 「石器の機能とライフヒストリー研究のための試み」『新潟考古』第8号 新潟県考古学会 pp.21-30
- 澤田敦 2003 「石器のライフヒストリー研究と使用痕分析」『古代』113 早稲田大学考古学会 pp.41-55
- 澤田敦ほか 2004 『吉ヶ沢遺跡B地点』新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 柴田徹 1994 「使用石材からみた旧石器時代の南関東における地域性について」『松戸市立博物館紀要』第1号 pp.3-25
- 柴田徹 2008 「剥片石器に利用可能な石材の比重値について - 関東地方を中心として -」『石器に学ぶ』第10号 石器に学ぶ会 pp.149-162
- 島立桂ほか 2003 『千葉東南部ニュータウン26 千葉市椎名神社遺跡・古城小弓遺跡・六通神社南遺跡・御塚台遺跡』千葉県文化財センター
- 島立桂 2014 「大型の槍先形石器について」『岩宿フォーラム2014 シンポジウム石器の変遷と時代の変革 - 旧石器から縄文石器へ -』岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会 pp.48-55
- 白石純・藁科哲男 2002 「鳥取県東郷町麻畑の新発見安山岩産地について」『環瀬戸内海の考古学 - 平井勝氏追悼論文集 - 上巻』古代吉備研究会委員会 pp.67-81
- 白石浩之 1989 「石槍の分類」『旧石器時代の石槍』東京大学出版会 pp.34-37
- 白石浩之 1997 「石槍の分布とその様相 - 槌状剝離尖頭器から見た集団の動き -」『人間・遺跡・遺物3 - 麻生優先生退官記念論文集 -』発掘者談話会 pp.27-47
- 白石浩之 2018 「大形石槍の発展的意義と解体の真相を探る」『岩宿フォーラム2018/シンポジウム 大形尖頭器の技術組

- 織－岩宿時代社会の終焉を探る－予稿集』岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会 pp.2-14
- 鈴木次郎 1999 「寺尾・栗原中丸両遺跡の石器石材の再検討」『研究紀要4 かながわの考古学』かながわ考古学財団 pp.110-133
- 鈴木宏行 2002 「石器ブロック6～11 (Sb6～11)」『白滝遺跡群Ⅲ 白滝村 奥白滝1遺跡 上白滝5遺跡』北海道埋蔵文化財センター pp.357-375
- 竹崎真夫 1982 『しろやま 調布市入間町城山遺跡の第9次調査概報』調布市遺跡調査会
- 田代治ほか 1986 『西大宮バイパスNo.4遺跡発掘調査報告 一般国道16号バイパス関係－Ⅱ－』大宮市遺跡調査会
- 建石徹ほか 2008 「縄文時代草創期遺跡出土黒曜石の産地分析－新潟県内出土資料を中心として－」『津南シンポジウムⅣ 縄文文化の胎動－予稿集－』津南町教育委員会 pp.43-48
- 田中英司 1990 「木葉形尖頭器のデポ－富士見市羽沢遺跡－」『富士見市遺跡調査会 研究紀要』6 pp.21-24
- 田中英司 2001 『日本先史時代におけるデポの研究』千葉大学考古学研究叢書Ⅰ
- 田村隆 2003 「林小原子台再訪－東部関東における長者久保－神子柴石器群－」『考古学』Ⅰ 安齋正人編 pp.1-50
- 中村由克 2022 「東北地方の珪質頁岩（東北頁岩）について」『岩宿フォーラム2022／シンポジウム 東北頁岩と北関東地方 予稿集』岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会 pp.12-22
- 野口淳 2001 「第Ⅱ章 東村山のあけぼの－旧石器時代」『東村山市史5 資料編 考古』東村山市史編さん委員会 pp.47-120
- 萩野谷悟・橋本勝雄 2024 「茨城県那珂市東ノ前遺跡の石槍－関東以西における大木系石器群の悉皆調査の成果を踏まえて－」『茨城県考古学協会誌』第36号 茨城県考古学協会 pp.99-118
- 橋本勝雄 2012 「本ノ木型尖頭器総論－槍と植刃器のかかわり－」『研究紀要』第9号 印旛郡市文化財センター pp.1-30
- 橋本勝雄 2015 「東日本におけるホロカ型細石刃石器群の様相とその時間的位置づけ」『旧石器考古学』80 旧石器文化談話会 pp.31-49
- 橋本勝雄 2017 「神子柴型石斧の実像とその特質－関東の事例を中心として－」『茨城県考古学協会誌』第29号 茨城県考古学協会 pp.1-35
- 橋本勝雄 2020 「周辺地域からみた北方系細石刃石器群の技術特性とその背景－北方系集団の南下に伴う石器群の技術的変容－」『旧石器考古学』84 旧石器文化談話会 pp.1-19
- 橋本勝雄 2021 「寒の戻り」と北回りの石器群－縄文時代草創期後半における本州と北海道の石器群の対比－」『茨城県考古学協会誌』第33号 pp.1-29
- 橋本勝雄 2022 「東日本における国府系石器群の特質とその意味－翼状剥片と有底横長剥片－」『旧石器考古学』86 pp.1-20 旧石器文化談話会 pp.1-20
- 橋本勝雄 2023a 「本ノ木型尖頭器総論（新編）」『先史考古学論考』六一書房 pp.125-153
- 橋本勝雄 2023b 「縄文草創期後半の両面加工石器群の様相とその展開－「寒の戻り」と石器群の適応－」『先史考古学論考』六一書房 pp.211-236
- 橋本勝雄 2023c 「「渡来石器」と北回りの石器群－縄文時代草創期後半における本州と北海道の石器群の対比－」『先史考古学論考』六一書房 pp.237-263
- 橋本勝雄 2023d 「印西市東海道遺跡出土の超大型ナイフ形石器－資料の紹介とその意義－」『印西の歴史』第14号 印西市史編さん委員会 巻頭図版・pp.1-21
- 橋本勝雄 2024a 「下総台地北東部採集の石器の特質とその意義－伊藤陸憲氏・横田清隆氏・高野安夫氏コレクションから－」『千葉文華』第47号 千葉県文化財保護協会 pp.1-10
- 橋本勝雄 2024b 「関東東部における神子柴型石斧の特質とその意義－常陸大宮市内発見の関連資料から－」『常陸大宮市史研究』第7号 常陸大宮市教育委員会 pp.1-17
- 橋本勝雄 2025 「神子柴・長者久保文化期の石刃石器群の特質とその意味」『茨城県考古学協会誌』第37号 pp.25-56
- 橋本勝雄 2026 「佐倉市井野南作遺跡採集の石器の特質とその評価」『佐倉市史研究』第35号（投稿中）
- 宝珍伸一郎ほか 2000 『猪野口南幅遺跡』勝山市教育委員会

- 三浦和信 1986 『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書-林小原子台・巢根・土持台・林中ノ台・吹入台-』 千葉県文化財センター
- 光石鳴巳編 2001 『秋季特別展 縄文文化の起源を探る-はじめて土器を手にしたひとびと-』 奈良県立橿原考古学研究所
- 宮沢恒之ほか 1972 『家の前・北の城遺跡』 松川町教育委員会
- 森嶋稔 1967 「長野県長野市信田町上和沢出土の尖頭器」『信濃』第19巻第4号 信濃史学会 pp.33-35
- 森嶋稔 1968 「神子柴型石斧とそれをめぐっての試論」『信濃』第20巻第4号 信濃史学会 pp.1-22
- 森嶋稔 1970 「神子柴型石斧とめぐっての再論-その神子柴系文化の系譜について-」『信濃』第22巻第10号 信濃史学会 pp.11-22
- 柳浦俊一ほか 2006 『県道浜乃木湯町線(湯町工区)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 山田尚友ほか 2010 『下野田稲荷原遺跡(第10次)・下野田本村遺跡(第4~6次)・中野田堀ノ内遺跡(第1次)』 さいたま市遺跡調査会
- 山根実生子・大下明 1999 『鉢伏高原遺跡』 養父郡広域事務組合
- 山内清男 1969 「縄紋草創期の諸問題」『Museum』224 東京国立博物館 pp.4-22
- 由井茂也ほか 1992 『川上村誌 先土器時代編』 川上村誌刊行会
- 米倉薫・阿部祥人 2002 『山形県西村山郡西川町 上野A遺跡発掘調査報告書-尖頭器製作址の研究-』 慶應義塾大学文学部民族学・考古学研究室
- 綿貫俊一 2011 「千葉市六通神社南遺跡の石器類」『大分県立歴史博物館 研究紀要』12 pp.31-34

追記：脱稿後、以下の資料(大型尖頭器)を見出したので追加しておく。

- 1. 岩手県奥州市下嵐江Ⅰ遺跡・下嵐江Ⅱ遺跡** 村木敬2013『下嵐江Ⅰ遺跡・下嵐江Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業埋蔵文化財センター(尖頭器石器群Ⅲ群:石器集中1・14出土、計8点(東北頁岩製))。
- 2. 福島県いわき市大谷遺跡** 本田善人ほか2000『常磐自動車道遺跡発掘調査報告16 大谷遺跡』いわき市教育文化事業団(長さ7.9cm・幅5.5cm・厚さ1.5cm・重さ70.8g、端部破片、東北頁岩、後世の堅穴住居跡から出土)。
- 3. 栃木県宇都宮市石川坪遺跡** 森嶋秀一ほか2015『第113回企画展「発掘された日本列島2015」地域展示 栃木の考古学を築いた人々』栃木県立博物館(長さ14.9cm・幅4.6cm・厚さ1.0cm・重さ73.51g、ほぼ完形、黒色頁岩、採集(故野澤岩蔵氏蔵))。
- 4. 千葉県流山市市野谷入台遺跡** 伊藤智樹ほか2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書3』千葉県教育振興財団(長さ6.8cm・幅5.9cm・厚さ1.5cm・重さ41.20g、端部片、東北頁岩製(白色))。
- 5. 千葉県成田市木の根東台(空港No.5)遺跡** 中山吉秀ほか1981『木の根-成田市木の根No.5、No.6遺跡発掘調査報告書-』千葉県文化財センター(長さ10.5cm・幅2.3cm・厚さ0.6cm・重さ15.2g、完形品、東北頁岩製)。
- 6. 千葉縣市川市雷下(8)遺跡** 服部智至ほか2019『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書14-市川市雷下遺跡(1)~(4)・(7)~(10)-』千葉県教育振興財団(長さ4.4cm・幅5.1cm・厚さ1.5cm・重さ31.4g、胴部破片、トロトロ石、表採)。
- 7. 千葉県香取市出口遺跡** 新田浩三・栗田則久1991『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書VI(佐原地区3)』千葉県文化財センター(長さ9.77cm・幅2.6cm・厚さ1.3cm・重さ36.9g、先端部欠損、ガラス質黒色安山岩、表採)。
- 8. 神奈川県相模原市当麻芹沢遺跡** 中川真人ほか2015『当麻芹沢遺跡』相模原市・相模原市教育委員会(長さ14.4cm・幅4.7cm・厚さ2.1cm・重さ133.8g、未成品、完形、ホルンフェルス、第2文化層(L1H)遺物集中地点出土)。
- 9. 神奈川県藤沢市用田鳥居前遺跡** 栗原伸好ほか2002『用田鳥居前遺跡』かながわ考古学財団(①長さ6.0cm・幅4.0cm・厚さ1.3cm・重さ32.31g、上半部欠損、硬質細粒凝灰岩、②長さ4.0cm・幅4.2cm・厚さ1.0cm・重さ25.74g、胴部破片ホルンフェルス、草創期第2石器集中地点出土)。
- 10. 静岡県沼津市八兵衛洞遺跡(第3次)** 池谷信之・北佐奈子2010『八兵衛洞遺跡(第3次)第二東名No.9・10・11・12地点沼津市5 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』沼津市教育委員会(長さ10.4cm・幅3.1cm・厚さ1.2cm・重さ35.3g、完形品、ガラス質黒色安山岩、栗色土層出土)。
- 11. 長野県諏訪市北踊場遺跡** 高見俊樹1995「第1章 旧石器時代の諏訪」『諏訪市史 上巻 原始・古代・中世』諏訪市史編纂委員会pp.9-154(計7点:黒色頁岩3、デイサイト(?)・ガラス質黒色安山岩・珪質頁岩・ホルンフェルス各1点)、採集)。